



資料展示「広島大学 原医研の60年」

広島大学原爆放射線医科学研究所附属被ばく資料調査解析部 助教 久保田 明子

放射線災害・医学研究拠点に多大なご理解を賜り共催していただいた、2020年度開催の資料展示「広島大学 原医研の60年」について報告する。

1. 被爆75年、広島大学医学部75年、原医研60年とコロナ禍

新型コロナウイルスのパンデミックは、これまで何度も繰り返されてきた様々な感染症のパンデミックを社会的に想起させ、医学の世界でも、実際の医療対応や研究の分野において、過去の研究や経験を再度ひも解く様子がみられた。パンデミックを起こした歴史的な感染症と言えば、代表的なものとして、天然痘、ペスト、コレラ、マラリア、スペイン風邪、SARSなどがあり、特にスペイン風邪は注視されている印象だ。それは新型コロナウイルスのイメージとの重なりもあるであろうが、やはりその流行の中で起きた第一次世界大戦、つまりパンデミックによって地球規模の戦争の時代へ突入した事実の重みも大きい。感染症パンデミックは単に医学の問題ではなく、社会全体への影響が絶大である。そのため、それらの情報を必要としたときに顧みられるようにしておくことは重要である。つまり、社会的に大きい影響を及ぼすパンデミックの医学研究や状況を示す記録や資料を残し、必要に応じて参照できるようにすることは、未来への備えの問題でもありと言えよう¹。

本質が違うので、感染症パンデミックと原爆を単純に並べて比べることはできないが、上記の様相は、両方に通じるところもある。新型コロナ

ウイルス流行の2020年は、奇しくも被爆75年であり、広島大学医学部設立75年でもあって、ちょうど顧みようというタイミングでもあった。そのため、コロナ禍と75年前の原爆を重ね合わせた方も多くいたであろう。2020年の新型コロナウイルス流行のある日、広島のある所で、流行の影響で解雇され生活に困窮した人たちを自宅に受け入れた女性は、どうして受け入れたのか？という質問に、こう答えた。「原爆のときを思い出しましてね。あのときも、こうして困っている人たちを私の親たちがね、受け入れておりました。」このように、広島では今も原爆が日常の一部となっている。

なお、資料展示のそもそもの企画のベースは、「2021年に設立60年を迎える原医研」であり、内容はほぼ原医研に特化したものにする予定であった。ところが、それを立ち上げて関係各所と相談するうちに、2020年の被爆75年、医学部設立75年も取り入れよ、というご助言を強く受けた。担当者としても、大学の医学部がまずあっての原医研設立という背景を重視して取り入れることとした。ただ、そのため、調査や展示の作成の時間的制約が厳しくなり、結果、「原医研の60年」とうたいつつ、その前半に重点をおいたものになってしまい、60年を十分に示すようなことはできなかった。それでも、研究機関のこれまでの歩みと研究の文脈をたどって、研究所のアイデン

1 上記は、例えば、Nistha Shrestha, Muhammad Yousaf Shad, Osman Ulvi, Modasser Hossain Khan, Ajlina Karamelic-Muratovic, Uyen-Sa D T Nguyen, Mahdi Baghbanzadeh, Robert Wardrup, Nasrin Aghamohammadi, Diana Cervantes, Kh Md Nahiduzzaman, Rafdzah Ahmad Zaki, Ubydul Haque.(2020). The impact of COVID-19 on globalization. *One Health* (11).100180, DOI: 10.1016/j.onehlt.2020.100180 <https://www.sciencedirect.com/science/article/pii/S2352771420302810>

ティティを捉えなおすことは、このコロナ禍のなかで意義があると考えた。周年がそれぞれ2020年と2021年にわたるものであったので、2020年度末から2021年度明け、と年度を渡るよう展示期間を設置した。もちろん、コロナ流行の状況による国、行政および大学の指針に合わせて、会場となる医学資料館での開館が可能な時期に実施することが大前提であった。

2020年度 資料展示
被爆75年 医学部75年 原医研60年

広島大学

原医研の60年

所蔵資料から見る原爆放射線医学研究所の歩み



在りし日の原医研
(旧研所)
以前は、現在の大学
病院、YHPビル、
7A館等にありまし
た。

会期延長

【期間】 2021年 3月26日(金) ~ 5月14日(金)
10:00~16:00 (土曜日・日曜日・祝日閉館)
初日3/26のみ13:00~16:00

入場無料

【会場】
広島大学医学部
医学資料館
広島大学キャンパス (大学病院前)

【ご注意】新型コロナウイルスの流行状況等により、中止、延期、開催方式の変更等がある場合もございます。あらかじめご了承ください。
【来場方法】新型コロナウイルス流行状況対応のため、お手数ですが事前に右記電話番号にご連絡ください。

主催 広島大学原爆放射線医学研究所
共催 放射線災害・医学研究拠点
(広島大学・長崎大学・福島県立医科大学)
協力 広島大学医学部
企画・製作
広島大学原爆放射線医学研究所
附属被ばく資料調査解析部

事前予約 ☎082-257-5877 解析部事務

2. 資料展示「原医研の60年」

2-1. 展示企画の経緯：原医研の源流、現在の放射線医学研究への文脈

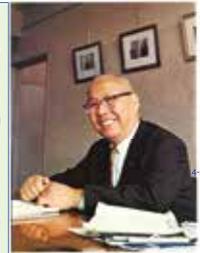
すでに述べた通り、周年に合わせて、本企画には「被爆75年」と「医学部設立75年」を取り組むこととなったため、「原爆被爆→医学部設立→そのなかでの原医研の誕生」の流れを重視した展示とすることとした。しかしながら、この内容は大変重要であるけれども、古い時期のこのため、

短期間での資料調査や収集は大変困難であった。そのため、この内容については、主に文献調査に重きを置き、パネル展示（文章での説明）とした。パネル展示はそのまま配布するパンフレットとなるので、来てくださった方々が持ち帰ってゆっくり読んでいただけたらとも考えた。

3. 原医研創世記—渡辺 漸と志水 清

初代所長 渡辺 漸 (1903~1984)

♪雪よ、岩よ、我がやどり…と歌う『雪山讃歌』という曲を皆さんはご存知でしょうか。アメリカ民謡のメロディに、1927(昭和2)年、旧制三高(京都帝国大学)山岳部が詞を付けたものですが、このグループに渡辺漸も入っていました。「漸」は「すすむ」と読みますが、よく「ぜん」として尊敬と親しみを込めて呼ばれていたようです。東京に生まれ、旧制三高のち東京帝国大学医学部に進みます。戦時中は植民地統治下の平壤(ピョンヤン)医学専門学校に勤めました。昭和22(1947)年来広、広島大学医学部の教授になります。そして、ここから原爆の医学研究に取り組む人生が始まります。



1957(昭和32)年の「放射線同位元素による実験的研究を中心としての白血病に関する病理形態学的研究」は特に前半の重要な研究でした。また、1950年代より「原爆放射能による障害の根本的対策の医学的究明を目的とする独立した、且つ高度の機能を具備した研究機関を設立」することが「広島大学それ自身の使命」である、と訴え、文部省(当時)にめぐるごとく何度も何度も働きかけ、そして1961(昭和36)年、原医研が設立されました。彼は初代所長となり、研究所の基礎を固めました。

これ以外にも、日本血液学会、日本放射線影響学会、厚生省や日本学術会議、ABCCなどで活躍しました。その半生は原爆医学研究と共にあったと言えるでしょう。

2代所長 志水 清 (1906~1991)



原爆の医学に関して、初代所長・渡辺 漸がどちらかという“学究の人”であったとすれば、2代所長の志水清は、広島社会や被爆者に近く寄り添った人物だったと言えます。

1945年8月の「その時」、彼は陸軍技師としてシンガポールにいましたが、彼の妻と二人の子供は広島市内で被爆、広島二中の一年だった次男は即死しました。戦後は広島を離れ、特に島根県では10年近く衛生行政に従事しました。ところが1959(昭和34)年、「次男の霊がよんだのでしようかなあ」と広島に戻り、広島市の衛生局長となりました。そして1961(昭和36)年、できたばかりの原医研の教授になります。1967(昭和42)年には渡辺漸の後を受けて2代目の所長に就任しました。

大切な家族の被爆と衛生行政の経験は、原医研での志水の原動力となったでしょう。志水の活躍は被爆者に対する医学的調査研究や原医研の発展への努力、被爆者の援護や医療に関する法整備、行政への提言などの多くの場面で見られました。特に、所長就任のころ実施が始まった「爆心復元調査」では原医研も大きな役割を果たしました。これは社会医学調査という学術的な視点もありましたが、それ以上に、多くの被爆者や市民が参加したことで、単なる学術調査ではない、意義の深いものとなりました。彼はここで、社会と共に歩む科学研究を実現したのだと思います。

今回は、原爆投下前の広島、特に近代と言われる時代の広島の特徴でもあった「軍都」と医学というテーマで話をスタートさせた。最近、原爆を受けたという被害者性だけでなく、戦争で各地を侵攻していた日本の加害者性も注目すべきだという視点が一般的になってきた。その1つに「軍都広島」を考えるとということがあるが、本件では特に軍都と広島との関係を少し述べた。

軍都広島の実現は日本が対外戦争を展開するにつれて見られた。日清戦争(1894年)、日露戦争(1904年)、第一次世界大戦(1914年)の10年ご

との対外戦争で一応全て勝利者側に日本がいたことは、軍都にとって大きな意味があった。広島は人口も増え、経済発展も見られ、都市として成長することとなる。その一方、明治時代の途中で広島の医学校が廃校になったことで、広島で医師が養成されることは難しくなっていた。近隣に岡山医科大学という、優秀な大学があったこともその事情にあったかもしれない。

しかし、人口増加、日本の海外戦争の可能性の増大が進むと、広島の医者不足は深刻になる。例えば、特に一番最近の戦時においては、広島市の医師は疎開することを禁じられた。つまり、のちに原爆が投下されることを知らず、広島の医師は広島から出ることができなかった。また、戦時の軍医養成の問題もあって、医師育成は喫緊の課題となる。そこで、多くの岡山医科大学の教員陣の協力を得て、現在の広島大学医学部の前身である広島県立医科専門学校が設立された。時の校長(学長)の林道倫は、戦況を心配して開校式を早めた。それが、1945年8月5日であった。つまり、広島大学医学部の前身校は、スタートした翌日にまず自らが原爆の被災者となった。

少し長くなったが、このことは、今回伝えなかった要点であるため述べた。これは、広島の医学、現在の広島の医学研究の在り方と、まず無関係ではないはずだ。例えば、日本の緊急被ばく医療、大災害時の緊急医療の源流の1つは原爆被爆とも言われるが、原爆によってそういった医療活動や医学研究を期待された当時の広島大学医学部は、そのスタート地点で既に重大な被害者でもあった。そして、こういった状況が背景の要点となって、のちの原医研の設立につながると考える。今回、こういったことを改めて確認でき、展示に生かしたことはよかった。強めの助言に感謝している。なお、長崎原爆とほぼ爆心地となった長崎医科大学のことも合わせて、それぞれの被爆地での

原爆医学研究の流れを考えることも重要だと考える。しかし今は紙幅も考察の時間もないため、割愛する。今後の重要な課題としたい。なお、こういった広島と長崎という、放射線災害・医科学研究拠点の、70年以上も前に起点を持つ2地点の文脈を捉えることは、まだ10年余りしかたっていない福島の問題や、3地点すべての今後の研究発展を見るうえでも、備えておきたい意識であるとも考える。資料展示は過去を示すだけではない。

2-2. 展示構成：展示資料の選択

ただ、一方で、上記に深く関連し、且つ、多くの方に見ていただくのにふさわしい、ある意味「分かりやすい」資料というものがほとんどない、というのが問題となった。コロナ流行で資料探索にも行けない。そこで、今回は割り切って、展示する資料(特に原本資料)は、上記と切り離して検討した。具体的には「原医研60年」を記念して、今までほとんど公開していない3つのコレクションよりその一部を初公開とすることとした。

その3つとは、

- (1) AFIP 返還資料より写真資料
- (2) 京大資料
- (3) 爆心復元調査資料(湯崎稔資料)

である。

(1) AFIP 返還資料より写真資料

原爆投下直後、1945年秋より、戦勝国で占領国であるアメリカは、被爆地に調査団を派遣し、可能な限りの原爆被爆に関する医学記録や文献、標本を収集した。日本の科学者の資料は、その当人にプライオリティを与えず、アメリカに持ち帰られ、研究に利用され、場合によっては当人とは無関係のところで論文となった。そしてその後、その多くは米軍病理学研究所(Armed Forces Institute of Pathology: AFIP)に集められた。

1960年代ごろより日本では奪われた原爆資料などの返還を要求する運動が盛んになったが、そのなかでこのAFIPの資料は、「広島のは広島に、長崎のものは長崎に」という形で返還され、広島分は原医研が受け取ることとなった。これがAFIP返還資料である。その内容のほとんどは医学に関するものであるが、一部、被爆直後の様子を写した写真もある。それらは日本人のカメラマンなどが撮影したものも多く、貴重である。今回は、いつも話題となる医学資料ではなく、敢えて、医学的でない、建物を中心とした被爆直後の広島の写真を数枚展示した。例えば、タイトルは「広島城」なのにその姿のない（石垣しかない）写真、あるいは収集された被爆前の中島地区の賑わいの写真などである。これらの写真は、特に地元を知る一般のお客様には大変喜ばれた。焼け残ってポツンと立つ被爆直後の広島の日本放送協会の建物について、NHKの取材の方がじっと見つめている姿もあった。

(2) 京大資料

京都帝国大学医学部は、1945年8月末より被爆地に入り調査を行った。数ある調査団の中でも早い動きである。その後、1945年9月20日ごろからの学術研究会議（現在の日本学術会議）の研究調査班に組み込まれた。本資料は、このときの京大医学チームの調査の記録である。1945年9月初旬の被爆者健康調査票などは他の調査団には見られない貴重なものである。

更に、京大調査班（医学・物理）は、1945年9月18日の枕崎台風による山津波に会い、死亡者や重傷者をだすなどの大変な打撃を受けた。そういった経緯を乗り越えた資料群は一層意義が高いと考える。

本資料は、1980年代に京都大学医学部より寄贈された。現在もまだ整備中であり、本来は公開

を待つべきところであるが、特別にその一部を公開した。

(3) 爆心復元調査資料（湯崎稔資料）

WHOでも議論がされているが、人は大災害等大きな厳しいできごとに合わせて、特に「生き残ってしまう」ことで、非常に深い心の傷を負うことがある（関係性の欠如）。議論自体はチェルノブイリ原発事故のころから盛んになり、特に2011年の福島原発事故以後に重視されるようになるが、それらに対する心理学的なケアとして、その事象に関連することをまずは無理のない範囲で語る、という方法があるという。これは現在の指摘であるが、それに近い動きが、広島原爆からの復興期に見られた。爆心復元調査である。

これは、もともとはNHKの番組の「爆心地付近の原爆前の情報を募集する」という企画であったが、広く反響を呼び、多くの市民が、自身の持つ写真や文献、記録などを手に集まり、語り合った。そういった活動に、原医研は協力することとなった。1960年代後半の出来事である。これは医学研究所の取り組みとしては珍しいが、当時の2代所長・志水清は社会医学が専門であったし、当時の原医研にはこの調査の中心的な人物として大きな仕事を行った社会学者である湯崎稔がいた（原医研はこのように、日本の科学研究所では珍しく、当初より社会学的視点をも研究範囲としていた）。この調査は規模も大きく、行政、NHK、市民を巻き込んだ複雑な運営もあり、困難が多かったようだが、結果として、現在の平和記念公園付近（中島地区）の被爆前の地図を完成させた。現在、その巨大な銅版製の地図は、広島平和記念資料館に納められている。原医研にとっては学術調査であったが、被爆者や市民にとっては戦争と原爆により寸断され関係が欠如したものを取り戻す必要な行為であったに違いない。ここに、科学

と社会の協同を確認できる。科学と社会のコミュニケーションは困難だけれども不可能ではないという心強い前例だ。また、原医研は、この社会学的プロジェクトから「近距離被爆生存者に関する総合医学的研究」という重要な医学プロジェクトも導き出した。1972年正月の教授会で正式に承認されたこのプロジェクトはその後、爆心地から500m以内で被爆した生存者の医学的研究という重要で独自の医学研究を発展させた。これは、先の社会学的調査研究に依るところが大きく、かつ放射線の人体影響研究にも大きく寄与することになる。ここに、社会とともにある科学、社会に寄与する科学の実現が見られると言える。今回はそういった調査資料より、特に重要とされた中島地区に関する調査資料を初公開した。

3. 反響など

通常、資料展示は、原爆忌近くの8月を中心とした時期に実施しているが、今回は全く離れている時期の開催となったため、またコロナ流行状況なども考えれば、多くの皆様に見ていただくことは不可能であろうと予測していた。実際、展示はオンラインではなく、事前予約制での来館閲覧で、流行状況でいつ閉館（展示中止）になってもおかしくないというなかでの実施であった。

しかしながら、予想に反して、事前の手続きの面倒もいとわず、のべ200名近くの方の来訪を受けることとなった。このコロナ禍で、こんな小さな展示にわざわざ足をお運びくださった皆様には感謝に堪えない。

また、事前予約でどんな方々がいらっしゃるかわかることは、いつもと違う経験であった。たくさんの方の医学関係（地元の医師会関係、研究者、研究機関の方々）、被爆者の方、原爆被爆関連の活動をされている皆様、マスコミ関係者の来室は嬉しく、またご挨拶に翻弄される日もあるほど

だった。筆者が特別に嬉しかったのは、原医研の所属の皆様が多く来てくださったことである。こんなに励まされることは滅多にない。また、来ていただいた方々から会期延長の希望を頂戴し、関係各所のご理解を賜って、期間を5月まで延ばすこととなった。

マスコミでの報道は、展示開始時にはNHK広島島のニュース、中国新聞で取り上げていただいた。中国新聞では、「原医研60年」の田代所長のインタビュー記事とともに合わせて資料展示の案内が掲載された（2021年3月31日）。朝日新聞広島版には、展示があと3日で終わるところでの掲載であったが（2021年5月12日）、この反響は特に大きく、予約が急にたくさん入り、最後の3日間、筆者はほとんど医学資料館で過ごすこととなった。ここでは、展示ガイドを多く望まれた。

来場者の方との交流の中で、特に印象に残った言葉がある。「京大資料」の展示のほとんどは、1945年9月初旬のある地区で実施された健康調査票であった。当然ながら、氏名や住所の一部などの個人情報プライバシーを守るためにマスクングをしている。だが、ある女性はそれを見て私にこう言った。「何で名前を隠すん？私のおばさんがおるかもしれないのに」

展示しているのは医学記録であるが、本資料はもはや医学記録だけの意味ではない、ということを感じた。また、これは、被爆地広島での開催ならではの、資料の在り方や本質を問うものだ。当然、研究資料、医学記録ということで、見せることはままならない。例えば現在の公文書管理法に準ずれば、「基本110年（140年）後に公開」ということになる。このできごとはアーカイブズ学研究としても、社会学研究としても重要な原爆資料を巡る課題だ。

また、直接展示と関連があるとは言えないが、

2件、つながりを感じる出来事があった。1つは、広島大学の広報誌『HU-plus』で原医研の設立60年の特集が組まれたことである(2021年8月号)²。記事の中では、本展示の様子も紹介していただいた。展示終了後も、こうして大学の公的な媒体に記録が残るといふことはありがたいことである。

もう1つは広島市の動きである。資料展示中の2021年4月7日、松井一實広島市長の定例会見において、原医研と放射線影響研究所の名前を挙げて、原爆に関する医学データや関連資料の保存の重要性を訴える話を取り上げられた³。市長の口から、AFIP返還資料、京大資料、アーカイブ化という言葉がでるとは感激である。是非、行政のお力添えもいただいて、原爆の医学資料を正しく保存し継承する方向に進んで欲しいと願う。

4. 今後の課題

今回の展示ほど、企画書を長い間こねくり回したことはない。いつもの内容の検討に加え、様々なところでコロナ・パンデミックの影響を受けた。

オンラインにすれば、というご助言もあったが、実際はそれに向けての環境整備や内容の検討が非常に難しい。例えば、映像制作や発信方法、不正利用の防止方法などの検討というのは、対面での資料展示とは全く違うものであるため、安易にオンラインに変更することは不可能である。オンラ

イン発信には、最初から綿密な、それなりの企画・運営の力が必要だ。また、筆者個人としては、やはり原本を見ていただきたい、という気持ちが強い。来場者が少なくても、熱心に真剣に見てくださる方がいるのであれば、やはりご来場いただく展示活動は継続したいと考える。

筆者自身は科学者ではない。科学研究所に所属する非科学者である筆者(専門は科学史資料のアーカイブズ学)の、微力ながらもできそうなことと言えば、科学研究所を広く皆様に知っていただき、科学と社会をつなぐ努力をすることだと考えている。これはずっと考えているのだが、今回の展示では更にその思いを強めた。拙い展示ではあるが、また感染状況によっては難しい点も多くあると思うが、今後も努力を怠らず、地道に続けていきたいと考える。

謝辞

本展示においては、広島大学医学部、同医学資料館には、いつもながら、大きなご理解とご支援を頂戴した。特にコロナ流行下であったため、ご心配もひとしおだったと考える。また、放射線災害・医科学研究拠点にも引き続きご理解とご協力をいただいた。末尾ながら、深く感謝を申し上げる。

² https://www.hiroshima-u.ac.jp/system/files/169265/HU-plus_vol.16.pdf?fbclid=IwAR35s8bm9kFICFUhG0y48dMjwqlqVzYWb6BpNX7g5BzAFx_OhTaLTTYLUAZ0

³ 現在ユーチューブで閲覧が可能 <https://www.youtube.com/watch?v=PmGR23dV8Do>